

奈良・平城京跡^{へいじょうきょう} (3)

1 所在地 奈良市四条大路五丁目

2 調査期間 二〇〇六年(平18) 六月～八月

3 発掘機関 奈良県立橿原考古学研究所

4 調査担当者 岡田憲一・重見 泰

5 遺跡の種類 都城跡

6 遺跡の年代 奈良時代～鎌倉時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(奈良)

調査地は、平城京跡右京四条一坊九坪の西北部に相当する。調査の結果、奈良時代の落ち込み、井戸一基のほか、平安時代から鎌倉時代にかけての東西溝一条、粘土採掘坑六基などを検出した。中世の東西溝SD〇一は、当初三条大路南側溝の可能性が考えられたが、その下面で平安時代には埋没していたと考えられる落ち込みSX〇二を検出したことから、南側溝の可能性

は希薄となった。

木簡は、この落ち込みSX〇二から一点出土した。SX〇二は、調査区東北隅を北西から南東へ斜行し、長さ一m以上、深さ一・七mを測る。対岸が検出されていないため、正確な規模は不明であるが、東に約三〇m離れた地点で同年度に当研究所が実施した調査において、これと同様の堆積及び遺物が確認されたことから、かなり大きな広がりがあると推察される。堆積内容は、湿地状を呈していたと思われる泥質のもので、大きく三層に区分できる。下層は地山崩落による堆積が主体を占め、遺物をほとんど含まない。中層は暗紫灰色シルト質粘土で、平城宮Ⅲの土器(七三〇～七五〇)を主体とする土器、瓦類のほか、多くの木製品が出土しており、木簡もここから出土した。上層はオリブ灰色砂混粘土で、平安時代の遺物を含む。なお、中層と上層の間で、集中廃棄されたと考えられる遺物群を検出した。それらの土器は概ね平城宮Ⅴの土器(七六二～七八四)に比定される。

落ち込みSX〇二の形成時期は明らかではないが、当該地点周辺は旧秋篠川の流路にあたりと想定されることから、開析された谷が埋め立てられることなく窪み、湿地状を呈していたものと考えられる。遺物は、近隣からの廃棄行為によつて集積されたものであろう。

なお、奈良時代の井戸SE一五からは、「日」と墨書された須恵器杯Bが出土している。

8 木簡の釈文・内容

(1) ・「十一・二十七□十一子□十一□□七七七□十一十

〔可々可々カ〕

・「七□七□子□□□□□□□□七□十一□□

(319)×30×7 019

上端及び左右両辺は削り調整が施され原形をとどめているが、下端は折損する。板目材である。墨書は両面にあり、いずれも文字は明瞭であるが、全体的に字形が整わず、筆の運びも不安定である。墨書の内容には特に意味的なまとまりはないようで、同じような文

字を繰り返していることからみて、習書であろう。釈文は、墨書に最も近い文字を選んだが、どのような文字を書こうとしていたのか厳密にはよくわからない。

9 関係文献

奈良県立橿原考古学研究所『奈良県遺跡調査概報 二〇〇六年度（第一分冊）』（二〇〇七年）

（1）7・9 岡田憲一・重見 泰、8 鶴見泰寿

